# 研 究

# 幼児の食事の意義理解の発達過程

一園での食事経験の違いが幼児の食事の意義理解に与える影響-

瀬尾 知子1). 榊原 洋一2)

#### 〔論文要旨〕

本研究では幼児の食事の意義理解の発達過程に園での食事経験の違いが及ぼす影響について検討を行った。まず食事場面の保育者の言語的働きかけの検討を行った。その結果、弁当実施の幼稚園の保育者の方が食事のマナー、食事以外の内容に関する発話が多く、給食実施の保育所の保育者の方が栄養、食事に関する内容の発話が多かった。次に弁当実施の幼稚園と給食実施の保育所に通う園児を対象に、食事の意義理解の発達過程の検討を行った。その結果、弁当実施の幼稚園と給食実施の保育所の園児では、食事の意義理解の過程に有意な違いがみられた。以上の結果から、園での食事経験の違いが幼児の食事の意義理解の発達過程に影響を及ぼしていることが示唆された。

Key words:幼児、食事の意義、食事形態、園種、保育者の働きかけ

# I. はじめに

近年、子どもへの食育の重要性が認識され、学校や保育所などで食育の取り組みに関するさまざまな実践が行われている<sup>11</sup>。しかし、実際に幼児が食事の意義をどのように理解しているのかといった、食事の意義理解に関する研究は非常に少ない。子どもの発達段階に即した食育の実施をするためには、子どもの食事の意義理解の発達過程を明らかにする必要がある。本研究では、食事の意義理解を、食事を身体と心の健康を関連付けて理解することと定義し、幼児の食事の意義理解の発達過程に園での食事経験の違いが影響を与えるかを検討した。

これまで食事の意義理解に関して主に素朴生物学に関する研究の中で、幼児が生物固有の身体現象である成長、病気に関して、食事に関連付けて理解しているのか検討されている<sup>2~5)</sup>。3歳児は成長に関して、また、

5,6歳児では食べることを身体の健康や成長に関連付けて理解しており、6歳後半には食べることを心にも関連づけて理解していると指摘されている。しかし発達に伴い幼児期はどのような根拠に基づき食事の意義を理解し、変化するのか十分に検討されていない。

また、幼児にとって食べることは生活の中心であり<sup>7)</sup>、いつ、何を、どのように食べるかといった食行動は食事経験を通して学習し<sup>8)</sup>、幼児の食行動は他者とのやりとりを通して確立することが多くの研究で指摘されている<sup>9~13)</sup>。幼児の食行動には、親や周囲の環境が影響を与えており、特に食事中の働きかけの中心が母親である場合が多いことから、母親の食事に関する意識や養育態度が幼児の食行動に与える影響に関して研究が行われてきた<sup>14~16)</sup>。そしてこれまで、幼児期の食事経験の違いが、幼児の食行動に影響を及ぼしていることが指摘されている。しかし幼児期の食事経験が、幼児の食事の意義理解といった認知レベルに影響

Developmental Process of Understanding Eating Perceptions in Preschool Children:

[2447]

Influence of Lunch Experiences on the Perception of Significance of Eating in Preschool Children Tomoko Senoo, Yoichi Sakakihara

受付 12. 7.10 採用 13. 6.25

1) お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (大学院生)

2) お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (研究職)

別刷請求先:瀬尾知子 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1 Tel/Fax: 03-5978-5477 を及ぼしているのかは明らかになっていない。

現在,幼児のほとんどが幼稚園,保育所(以下,園とする)に通っており,幼児は家庭だけでなく園での食事経験をしている。2006年に食育基本法が制定され,幼稚園教育要領(2008)と保育所保育指針(2008)の改定では食育に関して各園で取り組むことが新たに明記され,家庭だけでなく園でも幼児の食事に関する指導が求められている。しかし,幼稚園と保育所では給食施設の設置義務の有無や,また間食提供の有無といった制度上の違いがある。また,園での食事には弁当と給食の2つの食事形態があり,食事形態の違いにより保育者の働きかけが異なることが推測される。このように,幼児の食事の意義理解には,家庭だけでなく園での食事経験,保育者の働きかけが影響を与えていることが推測される。

本研究では、まず始めに、園での食事場面の保育者の言語的働きかけである保育者の発話に焦点をあて、 弁当実施の幼稚園と給食実施の保育所における保育者の言語的働きかけの差異を検討した。次に園での食事経験の違いによる幼児の食事の意義理解の相違点を検討した。

## Ⅱ. 対象と方法

#### 1. 対象

# (1) 園での食事場面における保育者の言語的働きかけ 園での食事場面の保育者の言語的働きかけの差異に

関する検討は、食事場面の観察により行った。食事場面の観察は、弁当実施の東京都内私立幼稚園、給食実施の東京都内公立保育所の各1ヶ所で行った。弁当実施の幼稚園の3,4,5歳児の各クラスの幼稚園教諭3名、園児40名、給食実施の保育所の3,4,5歳児の各クラスの保育士6名、園児74名を対象とした(表1)。

#### (2) 幼児の食事の意義理解の発達過程

園での食事経験による幼児の食事の意義理解の相違点の検討は、幼稚園、保育所に通う園児への選択課題調査により行った。園児への選択課題調査は、食事場面の観察を行った園を含む、弁当実施の東京都内私立幼稚園、給食実施の東京都内公立保育所の各2ヶ所で行った。弁当実施の幼稚園の3,4,5歳の園児98名、給食実施の保育所の3,4,5歳の園児121名を対象とした(表2)。

## 2. 方 法

## (1) 園での食事場面における保育者の言語的働きかけ

園での食事場面の観察は、観察者(筆者)が2010年6~10月の間に、1日1クラス、幼稚園、保育所ともに各6回(計12日間)の参与観察を行った。参与観察は、午前の自由遊びの時間から昼食時間、昼食の後片付けまでの2~3時間行った。参与観察の記録のうち、食事場面はクラス全員が着席してから食事終了の挨拶を行うまでとし、食事場面の保育者の発話すべてを分析対象とした。1回の食事場面は、幼稚園、保育所と

表 1 食事場面観察の対象園の年齢別対象児						
食事経験	年齢(歳)	男(名)	女(名)	合計(名)	平均(月齢)	範囲(月齢)
	3	4	4	8	47	41 ~ 53
弁当実施幼稚園	4	10	6	16	58	$53 \sim 62$
	5	9	7	16	68	$63 \sim 75$
	3	9	11	20	48	$42 \sim 51$
給食実施保育所	4	12	14	26	59	$51 \sim 64$
	5	11	17	28	69	$64 \sim 76$
合 計		55	59	114		

表2 園での食事経験ごとの年齢別対象児

食事経験	年齢(歳)	男(名)	女(名)	合計(名)	平均(月齢)	範囲(月齢)
	3	17	17	34	47	$41 \sim 53$
弁当実施幼稚園	4	15	15	30	57	$53 \sim 64$
	5	19	15	34	70	$63 \sim 78$
	3	15	21	36	45	$40 \sim 51$
給食実施保育所	4	21	22	43	58	$51 \sim 64$
	5	20	22	42	69	$64 \sim 76$
合 計		107	112	219		

第72巻 第5号, 2013

表3 保育者の発話内容の分類

上位項目	下位項目	定義	発話例
	食材や料理	食品や料理名、形に言及	これ, エビのチリソース。 今日のご飯, 油揚げが入ってるから 子ぎつねごはんっていうんだね。
食事に関する 内容	栄養	栄養に関する知識や, 好き嫌い なくさまざまな食べ物を食べる ことに言及	わかめ,体や髪の毛にもいいんだよ。 何でも食べて,元気もりもり。
	マナー	箸の持ち方,食器具の配置,姿勢, 挨拶,話題の選び方に言及	<ul><li>○○ちゃん、お箸上手だね。</li><li>○○ちゃん、その話ちょっとへん。</li></ul>
	時間と量	食事時間と食事の適正量に言及	何時にごちそうさまだっけ。 ○○ちゃん,この量食べられるかな。
食事以外の 内容		食事以外のクラスの出来事や家 庭での出来事に言及	あした,お芋ほりするんだよね。 ○○ちゃん,昨日おじいちゃんちに 行ったの。

選択課題における属性タイプと属性ごとの質問項目

属性タイプ	属性		
生物学的属性	背が大きくなる・長生きする 病気になりやすい(逆転項目) 太る(逆転項目)		
身体的属性	力持ち・かけっこが速い ボールを遠くに蹴れない(逆転項目) かけっこが遅い(逆転項目)		
心的属性	親切・我慢できる すぐあきらめちゃう(逆転項目) 怒りっぽい(逆転項目)		
無関連属性	赤色が好き・お絵かきが上手 粘土遊びが嫌い(逆転項目) 折り紙が上手にできない(逆転項目)		

もに30~40分であった。食事場面の保育者の言語的働 きかけである保育者の発話は、同意を得て録音し、調 査後に逐語録を作成した。発話単位は IC レコーダー の記録を手がかりとし、主語+述部で構成された発話 を1アイディアユニットとして分割したい。食事場面 の保育者の発話は、食事に関する内容と、食事以外の 内容の2つの上位項目に分類し、さらに、食事に関す る内容は、4つの下位項目に分類し、定義付けを行っ た(表3)。表3の分類基準に従って、分類を2名の 評定者が独立に行った。評定一致度は $\kappa = 0.75$ であり、 評定が不一致であったものについては協議により決定 した。なお、幼稚園は各クラス1名の担任制をとって おり、保育所は各クラス2名の担任制をとっており、 クラス担任1人当たりの園児数に大きな違いがないた め、担任数/保育者の総発話数で、担任1人当たりの 平均発話数を算出した。

#### (2) 幼児の食事の意義理解の発達過程

園児への選択課題調査は2010年6~10月に実施し た。幼稚園、保育所内の、他の子どもが来ない場所で、

評価者1名が被験児と個別に面接を実施した。調査を 開始する前に好きな食べ物や好きな遊びについて簡単 な質問を行った後で選択課題調査を実施した。選択課 題調査は、始めに「P ちゃんはいつもご飯食べる子な んだって」、「Qちゃんはいつもお菓子食べる子なん だって」と教示し、Pちゃんカード(食事カード)と Qちゃんカード(間食カード)の2枚の絵カードを子 どもの前に提示した(図1)。その後、4タイプ(生 物学的・身体的・心的・無関連)の属性判断を求める **絵カード各4枚(計16枚)を提示し(図2),「どっち** が○○になると思う?」と教示し、どちらの方が各属 性を多く有していると思うか判断を求めた。さらに. 「どうして○○だと思うの?」と選択理由を尋ねた。

選択課題の材料は外山60で用いられた生物学的属 性・身体的属性・心的属性・無関連属性と同じ4つの 属性タイプを使用し、判断を求める16項目の一部を改

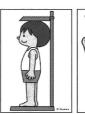


ごはんを食べるPちゃんカード



お菓子を食べるQちゃんカード

図 1



(背が大きくなる)







(力持ち)

図2 属性を求めるカード例

上位項目	下位項目	弁当実施幼稚園	残差分析	給食実施保育所	残差分析
食事に関する内容		226 (70.1)	▽ **	458 (83.9)	<b>A</b> **
	食材や調理	32 (14.2)		58 (12.7)	
_	栄養	50 (22.1)	▽*	143 (31.2)	<b>A</b> *
-	マナー	116 (51.3)	<b>*</b> **	120 (26.2)	▽ **
食事以外の内容		92 (28.9)	**	88 (16.1)	▽ **

表5 食事経験別保育者の各項目発話の出現頻度, 出現率, 残差分析の結果

注)数値は食事経験別保育者の発話頻度(回)を表し、()は保育者の各上位項目発話が保育者の発話に占め る比率(%)を表している。また、「▲」は有意に多いことを、「▽」は有意に少ないことを示している(\*\*p < .01,\*p < .05)

表6 理由付けの分類と食事に関連付けた理由付けの下位分類						
理由付け分類	下位分類	分類基準	発話例			
	栄養	栄養, ビタミン, カルシウムと いった概念に言及した説明	ご飯は栄養だから。 野菜はビタミンがあるから。			
食事関連	食事量	たくさん、もりもりといった食 事量に言及した説明	いっぱい食べると大きくなる。 モリモリ食べると成長する。			
	活力	元気, パワー, 力といった活力 に言及した説明	ご飯を食べると元気が出るから。 ご飯食べると力が湧くから。			
その他		ご飯を食べることと判断を求め た属性の因果的関係について説 明がないもの 食事と関連のない説明,または 無回答	食べるとママが褒めてくれるから。 お菓子は冷たいから。 わからない。			

変し使用した。生物学的属性とは、大きくなるや長生 きといった生物固有の身体現象、身体的属性は、力持 ちやかけっこが速いといった身体的機能に関するこ と、心的属性は、親切になるや我慢強いといった心の 働き、無関連属性は、赤が好き、お絵かきが上手といっ た食事とは直接関連のない事柄である。なお、判断を 求める属性は表4に示した。

#### 3. 分析方法

得られたデータに関しては、SPSS18.0J for Windows を用いて統計分析を行った。保育者の発話に関 しては、始めに食事に関する発話と食事以外の発話の 2つの上位項目に分類し(表5),保育者の発話頻度 2 (食事に関する内容・食事以外の内容)×食事経験 2 (弁当実施の幼稚園・給食実施の保育所)の χ²検 定を行った。次に、保育者の食事に関する発話をさら に4つの下位項目に分類し、保育者の発話頻度4(食 材や料理・栄養・マナー・時間と量)×食事経験2(弁 当実施の幼稚園・給食実施の保育所)の χ²検定を行い. 弁当実施の幼稚園と給食実施の保育所では保育者の発 話に差があるのかどうかを検討した。また、園児への 選択課題調査に関しては、始めに得られたデータの各 属性に関して得点化を行った。食事と判断を求めた属

性の関係について、食事に関連付けて説明できたら、 食事の意義まで理解していると判断し、食事に関連す るかしないかによって2つに分類した(表6)。「いつ もご飯を食べるPちゃん」の方が、背が大きくなる・ 長生き・病気になりにくい・太りにくい・力持ち・かけっ こが速い・ボールを遠くにけることができる・親切だ・ 我慢できる・あきらめない・怒りっぽくない・赤が好 き・絵が上手・粘土遊びが好き・折り紙が上手と判断 し、食事関連に着目した理由付けに1点を与え、属性 タイプごとに合計得点を算出し、理由付け得点とした。 そして、理由付け得点について、年齢3(3歳児・4 歳児・5歳児)×食事経験2 (弁当実施の幼稚園・給 食実施の保育所)×属性4(生物学的属性・身体的属 性・心的属性・無関連属性)の3要因反復分散分析を 行った。次に、食事に関連した理由付けを表5の分類 基準に従って3つの下位項目に分類し、得点化を行っ た。食事と判断を求めた属性の関係について、栄養に 着目した理由付けを行った場合に1点を与え、栄養に 関する理由付け得点とし、食事の量に着目した理由付 けを行った場合に1点を与え、食事量に関する理由付 け得点とし, 活力に着目した理由付けを行った場合に 1点を与え、活力に関する理由付け得点とした。そし て、それぞれの理由付け得点について、年齢3(3歳

		, <u>-</u> - <u>-</u>	W > 1 2 1 4 4 6 .	0 1/31 1 1/11d/212	
		生物学的属性	身体的属性	心的属性	無関連属性
弁当	3 歳児	0.50 (0.79)	0.53 (0.90)	0.29 (0.68)	0.26 (0.57)
	4 歳児	0.67 (0.84)	0.93 (0.98)	0.17 (0.38)	0.30 (0.60)
	5 歳児	1.65 (1.20)	1.74 (1.38)	1.00 (1.26)	0.85 (1.11)
給食	3 歳児	0.19 (0.40)	0.22 (0.49)	0.11 (0.52)	0.17 (0.70)
	4 歳児	1.26 (1.09)	1.58 (1.18)	0.81 (1.12)	0.77 (1.02)
	5 歳児	1.71 (1.09)	2.10 (1.23)	1.10 (0.93)	0.81 (0.92)

表7 理由付け得点の平均値および標準偏差

児・4歳児・5歳児)×食事経験2(弁当実施の幼稚園・給食実施の保育所)×属性4(生物学的属性・身体的属性・心的属性・無関連属性)の3要因反復分散分析を行った。交互作用が有意だった場合には単純主効果の検定を行い、さらに有意差がみられた場合の多重比較はBonferroniの方法を用いて行った。年齢と食事経験は被験者間要因、属性は被験者内要因であり、有意水準は5%以下とした。

#### 4. 倫理的配慮

東京都内の私立幼稚園では園長の承諾を得たうえで、園長から保護者に対して保護者会で説明を行い研究協力の了承を得た。また、東京都内の公立保育所に関しては、区子ども家庭部の課長、保育所所長の承諾を得た。そのうえで、公立保育所では所長から保護者に対して園便りを通じて説明を行い研究協力の了承を得た。

## Ⅲ. 結果

## 1. 園での食事場面における保育者の言語的働きかけ

#### (1) 保育者の発話数

食事場面の保育者の総発話数は864回(弁当実施の幼稚園:318回,給食実施の保育所:546回)であった。 担任1人当たりの平均発話数は弁当実施の幼稚園教諭 106回,給食実施の保育士91回であった。

#### (2) 保育者の発話内容

食事経験を独立変数とし、保育者の発話内容の上位項目(表3)ごとに保育者の発話数を従属変数として、保育者の発話頻度2(食事に関する内容・食事以外の内容)×食事経験2(弁当実施の幼稚園・給食実施の保育所)の $\chi^2$ 検定を行った結果、食事経験の違いによる偏りは有意であった( $\chi^2$ (1)=20.00、p<.01)。残差分析の結果、弁当実施の幼稚園では食事以外に関する発話が有意に多く、給食実施の保育所では食事に関する発話が有意に多かった(表5)。さらに、保育

者の食事に関する発話の下位項目(表3)ごとの保育者の発話数を従属変数として、保育者の発話頻度4(食材や料理・栄養・マナー・時間と量)×食事経験2(弁当実施の幼稚園・給食実施の保育所)の $\chi^2$ 検定を行った結果、食事経験の違いによる偏りは有意であった( $\chi^2$ (3)=36.80、p<.01)。残差分析の結果、弁当実施の幼稚園では食事のマナーに関する発話が有意に多く、給食実施の保育所では栄養に関する発話と食事の時間と量に関する発話が有意に多かった(表5)。

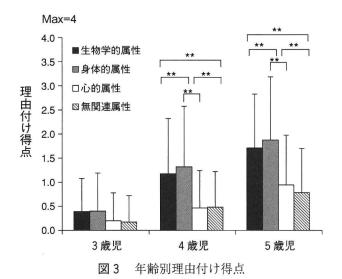
#### 2. 幼児の食事の意義理解

#### (1) 食事に関連付けた食事の意義理解

属性タイプごとの、理由付け得点に関して食事形態別、年齢別の平均値および標準偏差を表7に示した。 得点範囲は0~4であった。

食事と判断を求めた属性の関係について、食事に関連付けて理解しているのかを調べるために、理由付け得点について、3 (年齢)  $\times$  2 (食事経験)  $\times$  4 (属性タイプ)の3要因反復分散分析を行った。その結果、属性の主効果 (F (3,639) =48.96, p < .01)、年齢の主効果 (F (2,213) =38.05, p < .01)、属性×年齢の交互作用 (F (6,639) =7.88, p < .01)、食事経験×年齢の交互作用 (F (2,213) =5.22, p < .01) が有意であった。

属性×年齢の交互作用が有意であったため、年齢ごとに属性の単純主効果の検定を行った。その結果、4歳児では身体的属性≒生物学的属性>無関連属性≒心的属性の順に5%水準で有意に得点が低く、5歳児では身体的属性≒生物学的属性>心的属性≒無関連属性の順に5%水準で有意に得点が低かった(図3)。次に、食事経験×年齢の交互作用が有意であったため、食事経験ごとの年齢の単純主効果の検定を行った。その結果、いずれの食事経験でも年齢の主効果が有意(p<.01)であった。弁当実施の幼稚園では3歳児≒4歳児<5歳児、給食実施の保育所では3歳児<4歳



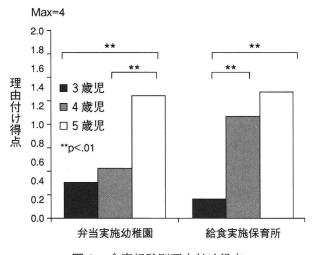


図4 食事経験別理由付け得点

児⇒5歳児(p < .01)の順に得点が高かった(図4)。 さらに、幼児が食事と判断を求めた属性の関係につい て、食事に関連付けて理解しているのか、食事関連発 話数 / 総発話数の比率による検討を行った。その結果 も、弁当実施の幼稚園では3歳児⇒4歳児<5歳児、 給食実施の保育所では3歳児<4歳児⇒5歳児の順に 得点が高かった(表8)。

## (2) 食事の着眼点別, 食事の意義理解

食事のどのような点に着目して判断したのか検討す

るために、栄養、食事量、活力のそれぞれの理由付け 得点について3(年齢)×2(食事経験)×4(属性 タイプ)の3要因反復分散分析を行った。

その結果、栄養に関する理由付け得点において、属性の主効果(F(3,639)=7.29、p<.01)、年齢の主効果(F(2,213)=11.84、p<.01)が有意であり、属性×年齢の交互作用(F(6,639)=1.83、p=.09)、食事経験×年齢の交互作用(F(2,2113)=2.54、p=.08)で有意傾向であった。次に、食事量に関する理由付け得点において(図5)、属性の主効果(F(3,639)=19.35、p<.01)、年齢の主効果(F(2,213)=10.84、p<.01)、属性×年齢の交互作用(F(6,639)=2.83、p<.05)が有意であった。さらに、活力に関する理由付け得点において(図6)、属性の主効果(F(3,639)=21.25、p<.01)、年齢の主効果(F(2,213)=8.42、p<.01)、属性×年齢の交互作用(F(6,639)=2.94、p<.01)が有意であった。

栄養に関する理由付け得点は、食事経験×年齢の交 互作用が有意傾向であったため、食事経験ごとの年齢 の単純主効果の検定を行った。その結果、いずれの食 事経験でも年齢の主効果が有意(お弁当p<.05、給 食p<.01)であった。弁当実施の幼稚園では3歳児 ≒4歳児<5歳児、給食実施の保育所では3歳児<4 歳児≒5歳児の順に5%水準で有意に得点が高かった (図6)。

また、すべての理由付け得点において、属性×年齢の交互作用に有意差がみられたため、年齢ごとに属性の単純主効果の検定を行った。その結果、栄養に関する理由付け得点では、4歳児では生物学的属性>無関連属性、5歳児では生物学的属性⇒身体的属性>無関連属性≒心的属性の順に5%水準で有意に得点が低かった(図5)。そして、食事量に関する理由付け得点については、4歳児では生物学的属性≒身体的属性>心的属性≒無関連属性、年長児では生物学的属性>心的属性≒無関連属性、年長児では生物学的属

	<b>役</b> 切れり及事内足元間と応元間数							
		生物学的属性	身体的属性	心的属性	無関連属性	合計		
弁当	3 歳児	15/83 (18.1)	18/74 (24.3)	10/59 (16.9)	8 / 49 (16.3)	51/265 (19.2)		
	4 歳児	19/99 (19.2)	25/83 (30.1)	5/70 (7.1)	9 /73 (12.3)	58/325 (17.8)		
	5 歳児	57/118 (48.3)	58/106 (54.7)	34/96 (35.4)	29/87 (33.3)	178/407 (43.7)		
給食	3 歳児	6 /53 (11.3)	9 /38 (23.7)	3 /33 ( 9.1)	6 /41 (14.6)	24/165 (14.5)		
	4 歳児	56/145 (38.6)	64/142 (45.1)	35/132 (26.5)	32/121 (26.4)	187/540 (34.6)		
	5 歳児	72/142 (50.7)	86/148 (58.1)	46/137 (33.6)	33/124 (26.6)	237/551 (43.0)		

表8 幼児の食事関連発話と総発話数

注)数値は食事関連発話数 / 総発話数 (回) を表し、( ) は幼児の食事関連発話が総発話に占める比率 (%) を表している。

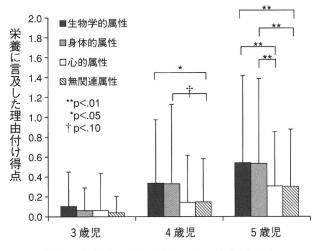


図5 年齢別栄養に言及した理由付け得点

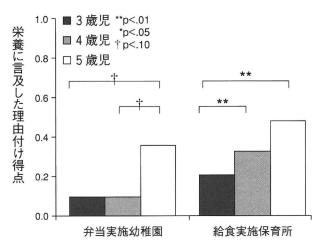


図6 食事経験別栄養に言及した理由付け得点

性>身体的属性>心的属性>無関連属性の順に5%水準で有意に得点が低かった(図7)。さらに、活力に関する理由付け得点については4歳児、5歳児共に身体的属性>生物学的属性≒心的属性≒無関連属性の順に5%水準で有意に得点が低かった(図8)。

#### Ⅳ. 考 察

#### 1. 園での食事場面における保育者の言語的働きかけ

弁当実施の幼稚園と給食実施の保育所の食事場面に おける保育者の働きかけの違いを、保育者の発話から 検討した。その結果、弁当実施の幼稚園と給食実施の 保育所では、食事場面における保育者の発話内容が異 なっていた。弁当実施の幼稚園では、食事のマナーや 食事以外の内容に言及した発話が多く、給食実施の保 育所では、栄養や食事の時間や量に言及した保育者の 発話が多かった。

先行研究の知見から、全員が同じものを食べる給食

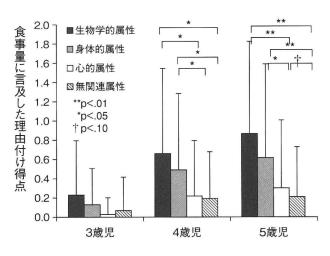


図7 年齢別食事量に言及した理由付け得点

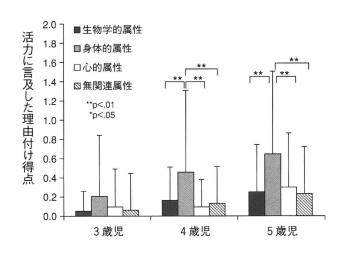


図8 年齢別活力に言及した理由付け得点

の場合は、食事内容が一緒であり、食事に関するやりとりの題材が全員に同じようにあるため、食べることに関連したやりとりを成立、維持させやすく<sup>12)</sup>、食事に関する内容に言及しやすかったことが考えられる。一方、弁当実施の幼稚園では、個々に弁当の中身が異なり、家庭の一部の食事を持ち込む形式であるため、食事に関する内容に言及しにくかったことが考えられる。また、弁当の場合は、個々の食欲や体格に応じてあらかじめ食事の量を調節したものを家庭から持参するのに対して、給食の場合は、食の細さに関係なく同じ量が配膳されるため、個々の子どもに応じた、昼食時間に食べられる適正量を配慮する必要がある。そのため給食実施の保育所では、食事時間や量に関する保育者の発話が多かったことが考えられる。

## 2. 幼児の食事の意義理解の発達過程

園での食事経験の違いにより幼児期の食事に対する

意義理解の発達過程が異なるのか検討した結果, 3歳 児では園での食事経験による食事の意義理解に違いは 見られなかった。しかし、4歳児になると弁当実施の 幼稚園より給食実施の保育所の園児の方が、食事の意 義を理解していた。弁当と給食といった食事形態の違 いが、保育者の食事場面での働きかけの違いを生じ、 幼児の食事の意義理解の発達過程に影響を与える一つ の要因となっていることが示唆される。また、発達に 伴い食事の意義の理解は、生物学的属性、身体的属性、 心的属性、無関連属性といった判断する属性ごとに異 なっていた。年齢が高くなるにつれて食事の意義を生 物学的属性や身体的属性に関連付けて理解するように なる一方で、心的属性や無関連属性は食事と関連付け なくなっていた。このように年齢が高くなるにつれて 食事の意義に関する知識量が増大するだけでなく、よ り分化、洗練されていた。

私たちは新しい知識を習得する時、既有知識に何ら かの形で知識を関連付ける推論、つまり帰納推論を 行っている。知識が限られている幼児は、日常の観察 や経験から新奇事例について推測を行う必要が頻繁に あり、知識の習得に帰納推論は重要な役割を果たす18)。 3歳児は生物学的領域の知識が確立途上にあり3),因 果的な説明が難しい。よって、3歳児は、保育者が食 事に関する内容の働きかけを多く行うか否か、また食 事形態にかかわらず、食事と判断を求めた属性の関係 について、食事に関連付けて理解することが難しかっ たと考えられる。しかし4歳児になると、保育者の食 事に関する働きかけが多く、昼食、間食といった食事 の機会が多い給食実施の保育所の方が、幼児は日常の 食事経験の中で、新奇な事柄へと推論を行う機会がよ り頻繁にあることが推測される。弁当、給食といった 昼食形態の違いだけでなく、給食提供のための調理場 があり、間食を提供する保育所と、調理施設や間食が ない幼稚園といった施設の違いも、幼児の食事の意義 理解に影響を与えていることも考えられる。また、保 育者の食育への関心度や食事に関する知識の違いや. 給食実施の園には栄養士がいることなどが、幼児の食 事の意義理解に影響を与えていたことも考えられる。 したがって、本研究の結果は、弁当実施の幼稚園と給 食実施の保育所といった昼食形態の違いが保育者の発 話内容の差を生む一つの要因として、子どもの食事の 意義理解の発達過程に影響を与えていたといえる。

#### 3. 今後の課題

近年,子どもを取り巻く食環境が変化し,家庭だけでなく,園での食育も大きく期待されている。園での食事場面は,単なる食欲を満たすための場ではなく,食に関する知識や経験を広げる学習の機会になっていた。今後は,年齢の発達を考慮した食事場面における保育者の働きかけの多様化が重要であると考える。

幼児の食事の意義理解に関しては園での食事だけで なく、家庭での食事や生活背景、母親の養育姿勢や食 育への関心度といったさまざまな要因が影響を与えて いることが考えられる。しかし、本研究では、保育者 の食事への関心度や家庭での子どもの食事に関わる要 因を調査していない。また、幼稚園と保育所では母親 の就業状況など、家庭環境が異なる可能性があり、そ の要因が本研究の結果に影響を与えていたことが考え られる。したがって、保育者の食事場面の働きかけ以 外の因子が、幼児の食事に関する認識の差となった可 能性があり、園での食事経験の違いが幼児の食事の意 義理解の発達過程に直接関わったと帰結できない。今 後は、家庭での食事、母親の養育姿勢も要因に含めて 幼児の食事の意義理解の発達過程を明らかにすること が課題である。また、5歳児で食事経験の違いによる 食事の意義理解に差がみられなかったが、3歳児、4 歳児の園での食事経験の積み重ねが5歳児の食事の意 義理解の発達の過程に何らかの影響を及ぼしているこ とが考えられる。今後は、課題を修正し5歳児以降の 食事の意義理解の発達過程を明らかにすることが課題 である。

## V. 結 論

本研究において、以下のことが明らかになった。

- 1. 弁当実施の幼稚園では、食事場面の保育者の発話 は食事以外の内容と食事のマナーに関する内容が有 意に多かった。
- 2. 給食実施の保育所では、食事場面の保育者の発 話は食事の量や時間と栄養に関する内容が有意に多 かった。
- 3. 食事経験の違いにより、食事場面の保育者の働き かけが異なっており、幼児の食事の意義理解の発達 過程に影響を及ぼしていることが示唆された。
- 4. 園での食事場面は食事の意義を理解する、学習の機会となることが示唆された。

#### 謝辞

本研究にご協力くださいました幼稚園、保育所の園児の皆様、園長、所長はじめ諸先生方に心より御礼申し上げます。また、研究のご助言をいただきましたお茶の水女子大学内田伸子名誉教授、小玉亮子教授、高浜裕子教授、秋田大学山名裕子准教授に深謝いたします。

本研究の一部は第8回子ども学会議学術集会,日本発達心理学会第23回大会にて発表したことを記します。

#### 文 献

- 1) 内閣府. 食育白書. 東京: 内閣府, 2011.
- 2) Rozengren KS, Gelman SA, Kalish CW, et al. As time goes by : Children's early understanding of growth. Child Development 1991 : 62 : 1302-1320.
- 3) 稲垣佳世子, 波多野誼余夫. 子どもの概念発達と変化一素朴生物学をめぐって. 初版. 東京: 共立出版, 2005.
- 4) Toyama N. What are food and air like inside our bodies? : children's thinking about digestion and respiration. International Journal of Behavioral Development 2000; 24: 222-230.
- 5) Inagaki K, Hatano G. Young children's understanding of the mind-body distinction. Child Development 1993; 64:1534-1549.
- 6) 外山紀子. 心と身体の相互性に関する理解の発達. 初版. 東京: 風間書房, 2007.
- 7) 無藤 隆. 子どもの生活における発達と学習. 京都: ミネルヴァ書房, 1992.
- 8) Rozin P. Development in the Food Domain. Developmental Psychology 1990; 26:555-562.
- 9) 中澤 潤, 鍛冶礼子, 石井恭子. 幼稚園教師の食事 場面における援助の分析—子どもの発達と教師の保 育観—. 保育学研究 1995;33(1):59-67.
- 10) 外山紀子. 食事場面における 1 ~ 3 歳児と母親の相 互交渉:文化的な活動としての食事の成立. 発達心 理学研究 2008;19(3):232-242.
- 11) 外山紀子, 無藤 隆. 食事場面における幼児と母親の相互交渉. 教育心理学研究 1990;38(4):395-404.
- 12) 外山紀子. 幼稚園の食事場面における子どもたちの やりとり一社会的意味の検討一. 教育心理学研究 2000;48(2):192-202.

- 13) 柴坂寿子, 倉持清美. 幼稚園クラス集団におけるお 弁当時間の共有ルーティン―仲間文化の形成と変化. 質的心理学研究 2008;8:96-116.
- 14) 八倉巻和子,村田輝子,大場幸夫,他. 幼児の食行動と養育条件に関する研究 第2報 幼児の食行動 に及ぼす養育条件. 小児保健研究 1992;51(6): 728-739.
- 15) 江田節子. 幼児の食生活に関する研究―幼児の野菜 摂取に関する食習慣と保護者の食意識について―. 人間環境学会 2007;7:35-47.
- 16) 江田節子. 幼児の朝食の共食状況と生活習慣, 健康 状態との関連について. 小児保健研究 2006;65: 55-61.
- 17) 内田伸子. 幼児はいかに物語を創るか?. 教育心理 学研究 1982;30(3):212-222.
- 18) 石田有理. 幼児の帰納推論における知識の影響—外 見と分類学的カテゴリー情報の利用—. 教育心理学 研究 2011:59(3):330-341.

## (Summary)

We investigated how kindergarten teachers and nursery workers interact with preschoolers during at lunchtime. The results indicate significant differences between kindergartens and nurseries. Moreover, it is found that in kindergartens where children carried their lunch from home, teachers interacted more frequently about table manners and showed little concern about the contents of meals. Child-care workers in nurseries where lunch was prepared on-site, in contrast, interacted with the children and spoke more frequently about nutrition and the contents of meals. We investigated whether understanding the significance of eating was different among children in kindergarten and nursery. The results indicate that there are significant differences between kindergartens and nurseries. These results suggest that the difference in lunch experiences of preschool children influenced their understanding of the perception of eating.

#### (Kev words)

preschool children, eating perception, a form of meal, kindergarten and nursery, childcare